

設楽町で130人が田植え体験

農家「地域、稲作に関心を」

ブランド米「女神のほほえみ」植える

標高約600㍍の高原に水田が広がる設楽町東納庫で15日、田植えイベントがあり、名古屋や豊橋など県内から約130人が集まった。地元の農家は「この地域と稲作に関心を持ってもらえれば」と期待を口にし、五平餅と豚汁で参加者を歓待した。

イベントは同町東部区の農家らと豊橋市の米穀卸売会社「東三河食糧」が開

催。募集に応じた家族連れや米穀店関係者が、豊橋生まれのブランド米「女神の

ほほえみ」の苗を計約20㍍の水田に植えていった。

田植えを初めて体験したという豊橋市の会社員、村松祐也さん(35)は「すごく楽しかったし、米作りの最初のところが分かった。子どもだけでなく大人の勉強にもなる」と喜ん

だ。長男の孝哉くん(4)は「泥がいっぱい妹が転んじゃった」と笑みを浮かべた。

地元の農家、後藤敬さん(72)は「若い人がこれだけ集まることはない。おいしい空気を吸って山の景色を見てもいい。地区の応援団になってもらえれば」と狙いを話した。

地区では後継者不足が深刻だ。後藤さんは「農業に興味を持ち、ここで農家を志すような人が出てきてくれればうれしい」とも語った。

女神のほほえみは2012年に豊橋市で発見された新品種のブランド名。粒が大きく、甘みと粘りが特徴で、東三河食糧が取り扱う。

山形県で昨年開かれた食味コンテストでは、設楽町で収穫された同ブランドの米が上位入賞を果たした。今年も東三河を中心に県内外の農家15軒が栽培している。(橋本謙蔵)



泥だらけになって苗を植える参加者(設楽町で)